



## ～ 目のまえのあなたと ～

管理者 金田 紘和

いわゆる重度と呼ばれる方々や強度行動障害を有する方々の受け入れを行うことを目的に「生活介護事業所プルスペース」を立ち上げて2年が経とうとしています。その期間、社会福祉を深く学ばれている方から「障害者の意思決定について」との題目について、インタビューを受ける機会がありました。そのインタビューでの質問1つは“障がいをお持ちの方々が「〇〇をしたい」との思いを告げられた際、支援者として「より良い答え」を知っている場合にどのような対応を取るか”という内容でした。

「障がいをお持ちの方」という言葉を主語に当てた場合、私たちにとっては「重度の知的障がい」や「発達障がい」、「強度行動障害」をお持ちの方々を想定します。それは回答者が1番多くかわりを持つ分野の「障がい」について思い浮かべることになるからだと思います。

知的に障がいのない方の「〇〇したい」と、知的に重度の障がいのある方々の「〇〇したい」には大きな違いがあるのではないのでしょうか。例えば行きたい場所で考えると、あくまで個人的な考えですが、知的に障がいのない方は「ショッピングモールやディズニーランド」と答え、知的に重度の障がいのある方々は「おうちやコンビニ」と答えるような気がします。上記の質問に対して、返答者の中には、「利用者さんの意見に寄り添いながらも、自分の考えに寄せてしまうかもしれない」と話された方がいたそうです。私も同じような回答をしました。おそらく質問項目に障がいの種別や、その方の成育歴や環境的な背景が設定されていれば、答えも変わってくるのではないのでしょうか。

あくまでインタビューですので、質問者の想定する「障がい」がどのようなものなのかはわかりませんが、私たちの生活の中には主語が大きくなってしまっていることで、上手く寄り添うことができなかつたり、円滑な問題解決への道のりを踏み出せなかつたりすることがあるのではないかと感じるようになりました。

誰一人、同じ人はいません。年齢や住む場所も取り巻く環境も異なります。それぞれの目標や目的に向かって「〇〇したい」、「〇〇するために」必要となる課題について、「障がいを持たれている方」という大きな枠で考えるのではなく、私たちの目の前にいる「利用者の方1人ひとり」との生活・活動の中で、お互いに納得できる目標設定やかかわり方を模索していくことを大切にしたいと思います。質問される立場ではありましたが、改めて、私たちの支援内容やかかわりについて考える機会となったこのインタビューの場を設けて頂けたことに感謝致します。



## ～ 健康診断 ～



今年度も荒瀬病院様のご協力を頂き、10月に当事業所に通われている利用者の方々の健康診断を行うことができました。病院という場所そのものが苦手な方や、レントゲン室に入ることや、採血時の注射に強い恐怖を感じられる方、利用者の方それぞれの「苦手や怖さ」に対して、病院側のご配慮にて無事に受診することができました。



(有) 万葉堂  
生活介護事業所  
プルスペース

